

【第44回城戸賞 応募作品】

タ
ク
ー
マ
ン
シ
ョ
ン
マ
ニ
ー

岡田 鉄兵

【あらすじ】

奥田ふみ子（69）は大阪から息子夫婦の住む東京に引っ越しして来た。持病はあるが、いつも元気でパワフルなおばちゃん。

息子の慎太郎は真面目、嫁の里香は気立が良い、孫の結は陸上部のホープ。ふみ子は東京での生活を楽しみにしていた。

しかし実際は「理想の家庭」ではなく、崩壊寸前の家族だった。

慎太郎は不倫、里香は鬱病を患い、結は学校でいじめられていた。

ふみ子は家族を元通りにするため、奮闘する。だが失敗ばかりが続いた。

ある日、里香が倒れた。医師から「妊娠してます」と知らされる。

子供は産むが、別れるとも言う里香。戸惑うふみ子たちだったが、里香の意思は固かった。

そんな折、ふみ子が体調を崩して入院する。そこに、息子の不倫相手がお見舞いにやって来た。二人が仲良さそうに話していると、検査で病院を訪れていた里香と鉢合わせしてしまう。

危うく大ピンチになるところだったが、ふみ子が機転を利かし、何とか無事に収めた。

結の中学最後の陸上大会。家族全員が用事を投げ出して駆けつけた。みんなで応援した結果、見事に優勝。久しぶりに一つになった奥田家。ふみ子は幸せの絶頂だった。

数か月後、無事に赤ちゃんが生まれた。新しいカタチに変わったが、幸せな家庭に戻りつつあった。

それはふみ子の頑張りの結果だった。

【登場人物】

奥田 ふみ子 (69) 無職

奥田 慎太郎 (41) 会社員

奥田 里香 (40) パート従業員

奥田 結 (14) 中学三年生

寺西 アキ (31) スナック経営

黒川 保 (50) 探偵事務所社長

小金 博人 (23) 探偵事務所従業員

沢村 美咲 (14) 結の同級生

医師

部長

教師

店長

生徒 1

生徒 2

その他

○ 緑ヶ丘市の俯瞰

朝。東京の新興住宅地に春の陽気が降り注ぐ。

街の中心部には奥田家のタワーマンションが堂々と建っている。

○ 奥田家のタワーマンション・階段く奥田家・表

小太りの女性が荒い息遣いで階段を上つて来る、奥田ふみ子（69）。

ふみ子「ハア、ハア、ハア……」

3階に着き、キョロキョロと見回しながら共用廊下を歩き出す。

奥田家の前で立ち止まり、呼吸を整える。そしてドアをそーっと開け、音を立てないように入っていく。

○ 奥田家・LDK

奥田慎太郎（41）が食卓で半額シールの貼られたパンを食べながら、パソコンで仕事のチェックをしている。

妻の奥田里香（40）はソファで毛布を被り、横になっている。

うつろな目でテレビを見て、口は半開きと虚無感が漂う。

娘の奥田結（14）が制服でやって来た。親に挨拶どころか目も向けず出ていく。

慎太郎も時計を確認し、行ってしまう。その間、微動だにしない里香。

部屋にはテレビのニュースがむなしく響いている。

この異様な光景を、部屋の隅からふみ子が隠れて眺めていた。

ふみ子「あ、あの……」

全く気づかない里香に近づくふみ子。

ふみ子「あの」

里香「（振り返り）あ、来てらっしゃったんですか」

ふみ子「ちよつと近くまで来たもんやから」

里香「朝早くからお出掛けですか？」

ふみ子「病院に。まあ、ただの検査やけどね」と部屋を見渡す。

隅々にホコリが溜まり、シンクには洗剤の物が山積み、衣類も散らかり放題だ。

里香「すみません。低血圧で朝が弱くて」

ふみ子「今日は天気ええから、お陽さんも入れな」

と窓を開ける。

だが隣にはビルがあり日陰になっている。

里香「タワーマンションと言っても、ここは低層階ですから」

ふみ子「……」

里香「遅刻しそうな時は、エレベーター待ちしなくても階段を使えるんでいいんですよ」

窓際に数年前の家族写真が飾ってある。

奥田家三人は満面の笑み、『引越し初

日』の文字が入っている。

ふみ子「(写真を見て)……」

○ 緑ヶ丘総合病院・1階ロビー

大きな近代的な建物。

ふみ子、椅子に座って会計を待っている。

隣の患者が読む週刊誌に釘付けになる。

『特集「家庭崩壊が増加中」手遅れになる前に手を打て!』の文字。

じつと見ているとページを捲られる。

ふみ子「あっ」

患者「なにか?」

ふみ子「(誤魔化して)この病院の会計、遅いでんなあ?」

患者「ここは処方箋貰うトコ。会計はあっちと指さす。

そこには自動支払い機が並んである。

ふみ子「ホンマやわ。ありがとう」

と足早に向かう。

○ 商店街

シャッター通りをトボトボ歩くふみ子。

雑居ビルの前で立ち止まる。

視線の先には『黒川探偵社』の看板。

『秘密厳守・明朗会計・相談無料』と書かれてある。

眺めていると隣に黒川保（50）が立つ。

黒川「お話だけでも、お伺いしますが」

ふみ子「（看板を指さし）あそこのヒト？」

黒川「はい。相談は無料ですよ、おねえさん」

ふみ子「『おねえさん』やなんて商売上手やわ」

と背中をパンツと叩く。

黒川「痛っ！」

○ 黒川探偵社・事務所

簡素な設備だが、清潔感はある。

応接セットにふみ子と黒川がいる。

少し離れた事務机には小金博人（23）がパソコンに向かっている。

黒縁メガネをかけ、真面目そうだ。

黒川「ご家族について調べて欲しいと」

ふみ子「こっちに来るまで、こんな事になつ

てるとは気づきもせんかった。あの子らに

聞いても『なんでもない』て言うだけで」

黒川「1か月前まで大阪に住んでおられた？」

ふみ子「そうです。お父さんの三回忌が終わ

って東京に来ました」

黒川「同居はなさらずに」

ふみ子「向こうは『ええで』って言うてくれ

たんやけど、氣い遣うから断ってん。それ

で近くに小さな部屋を買って」

黒川「おかしいと確信されたのはいつです？」

ふみ子「なんか変やなあとはずっと思ってた。

今日、連絡もせんと家を訪れたら」

黒川「会話が全然ない」

ふみ子「目も合わしません。息子の家は幸せ

な家庭やと思ってたんやけどねえ」

黒川「どこの家にも悩みの一つや二つ」

ふみ子「悩みどころやないで」

黒川「おせっかいじゃないですか？」

ふみ子「家族のためやからな」

黒川「ご自分の事だけをお考えになられた方が」

ふみ子「ウチの人生なんか、あとちよつとし
かあらへん」

黒川「しかしおねえさんのおっしやる幸せな
家庭なんて日本中、いえ世界中を探しても
無いですよ」

ふみ子「(興奮して) あるはずや。いや、そ
うなって貰わなアカンねん！」

黒川「(押されて) は、はあ」

○ タイトル『タワーマンションファミリー』

○ 株式会社カウカウ・表

都心のオフィス街、中堅規模の自社ビル。

○ 同・企画営業部

パーテーションで区切られているフロア。
慎太郎はパソコンで高齢者向けの健康グ
ッズや健康食品の通販ページを見ている。
そこに部下を呼び、画面を指さしながら
厳しく注意を始める。

黒川の声「奥田慎太郎42歳。通販会社の企
画営業部、課長。上司からの信頼は厚く、
特に直属の部長から評価が高いです」

ふみ子の声「あの子は昔から先輩とか目上の
方に好かれるねん」

部長がやって来て、手招きをする。

慎太郎は飛んでいく。

残された部下は苦々しい表情になる。

黒川の声「しかし部下からは嫌われており、
裏ではコバンザメ、腰ぎんちゃく、金魚の
フン、男芸者、人間のクズ」

ふみ子の声「それぐらいで」

黒川の声「問題は不倫でして、1年前から付
き合ってる女性がいます」

ふみ子の声「どんなヒトです？」

黒川の声「31歳のスナックのママ。出会い
は店を訪れた時でしょう」

○ 食品スーパー・店内

里香がレジ係できびきびと働いている。

黒川の声「奥田里香41歳、スーパーのパート店員。店のオープン時からの古株で、店長から一番頼りにされてます」

ふみ子の声「へえ、意外やわ。あの子はいつもボーっとしてるのに」

黒川の声「週六日も勤務してます」

ふみ子の声「家のローンを繰り上げ返済するて必死やねん。女がそこまで働かんでもな」

黒川の声「マンションの理事会の役員もしてるので忙しいですよ」

里香の後ろに店長が立ち、ささやく。

無表情で首を横に振る里香。

黒川の声「ここの店長はお嫁さんを気に入ってます」

ふみ子の声「ホンマかいな？」

黒川の声「ああいう女性は案外モテるんです。

浮気調査でも多いタイプですから。まあ、

里香さんの方は何とも思ってませんが」

ふみ子の声「なんで分かるん？」

黒川の声「プロとしての長年の経験です。それより問題は鬱病です。若い頃から通院して

いて、最近まで薬も飲んでたみたいですよ」

ふみ子の声「今は？」

黒川の声「数か月前から通院もしてません。

理由は分かりませんでした」

レジに客がいなくなり、ため息が漏れる

里香。

○ 緑ヶ丘第五中学校・校庭

新設の公立学校。

クラブ活動をしている生徒たち。

結は陸上部で長距離を走っている。

顧問の男性教師がストップウォッチを持ち、タイムを計測中。

黒川の声「奥田結、中学三年生。陸上部の副

キャプテン。市内の大会で準優勝するほど

の実力者。勉強もトップクラスですよ」

ふみ子の声「喋ってくれへんだけが心配で」

黒川の声「反抗期です。それは大丈夫ですよ」

ふみ子の声「年頃の子はそんなもんやね」

黒川の声「いじめられてるのが問題なんです」
ふみ子の声「いじめ」

黒川の声「同じクラスで、同じクラブのキャプテンの子が主犯格のようです。簡単に言うと学校の人気者に嫌われたんですよ」

ふみ子の声「そんな……理由は？」

黒川の声「断定できませんが、理由はあつて無いようなものでしょう。いじめつてそういうものですか」

結とキャプテンの沢村美咲（14）がラスト一周で競っている。

半周前からスパートをかけられ、引き離されて結は負ける。

美咲がたたえ合うように握手を求める。笑顔で応じる結。

黒川の声「今の時代、難しいのは表で分らないように裏でやるんです」

ふみ子の声「裏つて、陰口つて事？」

黒川の声「はい。LINEとかツイッターで」

○ 黒川探偵社・事務所

ふみ子と黒川が向かい合つて座っている。

ふみ子「それ、なんです？」

黒川「インターネットでお孫さんの悪口を書いて楽しんでるんです」

ふみ子「よう分からんけど結は知らへんの？」

黒川「そこが陰湿でして、分かるように誹謗中傷してます」

ふみ子「今時の子供はえげつない事するで。」

……あ、担任教師と部活の顧問が一緒つて聞いたんやけど、そのヒトは？」

黒川「気付いてません。それに先生はアテにならない。警察も事件性がないと動かない。本人が何とかするしかありません」

ふみ子「……」

黒川「エスカレートする場合もあるので要注意です。対応策など、詳しくは調査報告書をお渡ししますのでお読みください」

ふみ子「たった数日でここまで分かるんやな」

黒川「ご家族の携帯番号、メールアドレス、SNS

のIDなど個人情報を見せて頂いたので」
ふみ子「あんな暗号みたいなもの？」

黒川「あとはアイツが調べます」

とパソコンに向かう小金を指さす。

小金「(眼鏡を指であげて) 小金です」

ふみ子「メガネ？」

小金「コ・ガ・ネ」

黒川「彼は若いですが、腕は抜群です。もちろん、私が裏取りもしますが」

黒川、報告書の入った封筒を渡す。

黒川「実は、タワーマンション自体にも問題が多いんですよ。管理費や修繕積立金は高い、出掛けるのが面倒で引きこもりになる。あとはゴミ捨て、災害時、荷物の運搬と」

ふみ子「(うつむき) ……」

黒川「住人も独身、家族、シニアと様々。住む階でヒエラルキーまであるので理事会の話し合いも大変。良いのは眺望ぐらいで」

ふみ子「ウチは一番下の階ですけど」

黒川「(焦って) いえいえ、見晴らしも毎日

見てたら飽きますよ。下の方が安くていい」

ふみ子が立ち上がる。

ふみ子「お金は今度でよろしいか？」

黒川「はい、結構です」

頭を下げ、元気なく帰っていくふみ子。

黒川「(伸びをして) 相当落ち込んでたな？」

小金「報告書を読むと、もつとへこみます」

黒川「こっちは商売だからカネさえ貰えれば
どうでもいいがな。……お前、幸せな家庭
って見た事あるか？」

小金「社長のところ」

黒川「そうそう、警察官の私と専業主婦の美人な妻。そしてかわいい一人娘の三人家族」

小金「はい」

黒川「それがヤクザとの付き合いが上にバレて警察を懲戒免職。その後、仕事を転々と
して1年も経たずに家族は逃げてった。今は赤字ギリギリの三流探偵社かあ」

小金「幸せな家庭です」

黒川「バカにしやがって！」

とカラのペットボトルを投げつける。

○ 緑ヶ丘総合病院・診察室

心臓のエコー画像を見ているふみ子と医師。

ふみ子「手術？」

医師「先日の検査で、心臓弁の機能低下が認められました。人工弁を取り付けなければ治りません。手術日程を今決めて頂ければ」

ふみ子「悪いのは知ってましたけど、経過を見ようと言われてたんで」

医師「いつ頃の話です？」

ふみ子「あれはお父さんが最初のガンになる前やったから、還暦の頃やな」

医師「9年も経ちます。心臓弁膜症は確実に進行していく病気です。最近、運動や疲れが溜まった時に息苦しくならないですか？」

ふみ子「……手術は絶対に成功するん？」

医師「絶対はありません。患者さんは今年で

70歳、不整脈そして高血圧も」

ふみ子「(さえぎり) ほな、99%?」

医師「エコーだけでなく、実際に心臓を見て」

ふみ子「(さえぎり) 90%?」

医師「んー、まあ」

ふみ子「10回に1回死ぬやん」

医師「しかしほっておくと数年後には酸素吸引器が必要となり、その後は寝たきりになつて5年も経たないうちに」

ふみ子「なら、まだ大丈夫や」

医師「手術は早ければ早いほどいいんです！」

ふみ子が窓外に目をやると、奥田家のタワーマンションが見えている。

ふみ子「……ウチには先にやる事がある」

医師「命より大事なモノなんてあるんですか。泣きついて来ても遅いんですよ」

ふみ子「絶対に泣きつきまへん！」

とドアを強く締め、出ていく。

○ 通学路(夕)

結と美咲と生徒1と生徒2が帰宅中。

楽しそうに会話をしている。

十字路に着き、「バイバイ」と笑顔で手を振って結が曲がっていく。

美咲「美咲たちだけになると笑みが消える。」

美咲「今日のセンゴ（1500m走）で私に勝とうとしてんの。マジうぜー」

生徒1「副キャプテンになれたの誰のおかげと思ってるんだろ」

生徒2「部活のそういうのって内申書に書いて貰えんでしょ。チョーむかつく」

美咲「アンタたちが副キャプになれば？」

生徒1「今さら、無理じゃん」

生徒2「遅すぎだよ」

美咲「アイツが辞めたら、なれんじゃね？」

生徒1と生徒2が大笑い。

○ スナック『老婆の休日』・店内（夜）

寺西アキ（31）が経営する庶民的な店。

店内は賑わっていて忙しい。

アキは化粧も服装も派手、大きな声で喋り、手ぶりや笑い方も豪快だ。

カウンター隅で一人飲んでいる慎太郎。

そこにアキが来る。

アキ「忙しいから相手できない」

慎太郎「……」

客1「ハイボールおかわり」

アキ「はい。 (慎太郎に) ごめん。今日は帰って」

慎太郎「手伝うよ」

アキ「疲れてるからいいって」

慎太郎、上着を脱いでカウンターに入る。

そして溜まった洗い物を片付け始める。

アキ「(小声で) バイト代はカラダで払う」

と慎太郎のお尻を撫でる。

慎太郎「60分コースで頼む」

○ 奥田家・LDK（夜）

ソファでボーっとテレビを見ている里香。風呂上がりの結が冷蔵庫にジュースを取りに行く。そして自分の部屋に戻る。

そこに慎太郎が帰って来た。
食卓にある半額シールの貼られた弁当を
一瞥し、寝室に向かう。
里香は全く動かない。

○ ふみ子のマンション・表（夜）
築30年の鉄筋コンクリート造り。

○ ふみ子の部屋・1K（夜）
重い足取りで帰って来たふみ子、明かり
をつける。

若者が住むようなフローリングの部屋。
荷ほどきされていない引越しの段ボール
箱が積まれ、片隅には仏壇が置いてある。
わずかにある古い家具は部屋の雰囲気と
合わず、チグハグな印象だ。

買って来た弁当を電子レンジに入れる。
カーテンを閉めようと窓際にいくと、奥
田家のタワーマンションが目に入る。

ふみ子「（見つめて）……」
ピーとレンジが鳴る。

ソースの袋が熱で破けている。
フタごとゴミ箱に捨て、食べ始める。
封筒から調査報告書を出して読む。

慎太郎の不倫相手アキの画像、里香の心
療内科での処方薬、結のネットでの『キ
モツ』『きえろー』『4ネ』などの悪口。
顔を上げると亡き夫の遺影と目が合う。

ふみ子「……生き残った方は損やわ」
とご飯を口に押し込み、やけ食い。
侘しい一人の夕食。

○ 黒川探偵社・事務所
お札を数えている黒川、待つふみ子。
黒川「はい、ちょうどです。領収書の方は？」
首を横に振るふみ子。
そこへ小金がやって来る。

小金「報告書に書いてない事が出てきました」
黒川「言ってみろ」
小金「息子さんは、仮想通貨で200万円の

損益を出しています」

ふみ子「借金まであるって事？」

小金、うなずいて席に戻る。

黒川「……仕事柄、色んな家庭を見ますがおねえさんのトコはマシです。この前なんて」

ふみ子「(やえぎり) どうやったらええ？」

黒川「はあ？」

ふみ子「家族が元通りになるには」

黒川「難問ですね」

ふみ子「ちゃんと答えて。大金払ってんで」

黒川「こちらは調べるまでが仕事です」

ふみ子「ごちゃごちゃ言わんでええ。早く」

黒川「そんなむちゃな。(思案して) ……あ、

名案ってワケじゃないですけど」

ふみ子「焦らさんと言い」

黒川「話を聞いてみたらどうですか」

ふみ子「話を聞く？」

黒川「どんな悩みもヒトに話すと半分は終わりにみたいなものです。気が楽になつて間違いにも気づく。あとは、自ら解決していく」

ふみ子「さすが高いカネをぼったくるだけはあるわ」

黒川「人聞きの悪い事言わないでください。

うちはコスパ抜群ですよ」

ふみ子「よし。早速、試してみる」

黒川「単刀直入じゃなく、それとなく自然とですよ。無理強い絶対ダメですから」

ふみ子、話の途中で出ていってしまう。

○ 食品スーパー・店内

里香がレジ打ちをしていると、ジュースを二本持ったふみ子が並んでいた。

ふみ子「お疲れさん」

里香「！」

○ 同・表

駐車場隅でジュースを飲んでいるふみ子。

スーパーの制服のまま里香が来る。

ふみ子「(ジュースを渡し) はい」

里香「すみません。……何か用事ですか？」

ふみ子「まあ」

里香「内容は？」

ふみ子「あゝ」

里香「はい？」

ふみ子「言いたい事とかない？」

里香「私が、お義母さんに？」

ふみ子「ウチやなくても」

里香「じゃあ、どなたに？」

ふみ子「どなたというか……」

里香「世間にとか？」

ふみ子「そうそう世間とか。溜まってるのを

ぶちまけるんや。何でもいい、あるやろ？」

里香「特に無いですね。で、今日は一体？」

ふみ子「言いたい事が無いんならええわ」

里香「……」

ふみ子「……ホンマにない？」

里香「ホントにないです」

首をかしげる里香。

○ 株式会社カウカウ・1階ロビー

エレベーターが開き、降りて来る慎太郎。

入口近くにふみ子が立っている。

慎太郎、不満顔で歩いていく。

ふみ子「葬式みたいな顔して。息子の働くト

コを見に来たら迷惑か？」

慎太郎「そうは言ってないけど、突然だから」

ふみ子「昼ご飯、一緒に食べへん？」

慎太郎「なんで？」

ふみ子「なんでもや」

○ 定食屋・店内

昼時で混んでいる店。

カウンター席にふみ子と慎太郎がいる。

ふみ子「こんなうるさいと話もできんわ」

慎太郎「話あんの？」

ふみ子「こっちはない」

慎太郎「じゃ、オレに聞きたい事？」

ふみ子「まあ」

慎太郎「なに？」

ふみ子「アンタらの家族やけど」

騒がしいサラリーマン客が入って来る。
慎太郎「家族がどうしたって？」

ふみ子「その」

店員「から揚げ定食です」

と二人の前に料理を置く。

ふみ子「これ食べてから話すわ」

慎太郎「そんな時間ないよ」

ふみ子「ほんなら今度でええ」

慎太郎「なんだ、それ」

ふみ子と慎太郎が食べ始める。

ふみ子「(大げさに) めっちゃおいしいやん」

慎太郎「恥ずかしいから静かに食べよ」

膨れるふみ子。

その横顔を怪訝そうに見る慎太郎。

○ 緑ヶ丘第五中学校・表(夕)

結と美咲が話しながら出て来る。

するとふみ子が待っていた。

ふみ子「(大げさに) あら、結ちゃん。どん

な学校か見に来たら、ちようど出て来たわ」

無視して行こうとする結、それを美咲が

止める。

美咲「シカトはダメじゃない。結のおばあち

やんでしょ？」

結「……」

ふみ子「アンタらのマンションが建って生徒

が増えたから、この中学校ができたんや

てな。(校舎を見上げ) 新品はええなあ」

そこに生徒1と2が学校から出て来る。

美咲「じゃ、先行くから」

笑顔で去っていく美咲たち。

ふみ子「買い食いでもしよか？ お母さんに

はちやんと言うたるさかい大丈夫やで」

結、黙ったまま先に行ってしまう。

ふみ子「怒ったん？ なあ、怒ったん？」

とあとを追う。

○ 通学路(夕)

速足で進む結、後ろを付いていくふみ子。

ふみ子「(息が切れ) ちよ、ちよと待って」

結の歩くスピードがどんどん早くなる。限界に達し、ふみ子は前かがみで止まる。ふみ子「文句でもええから、なんか言うてー」遠ざかる結の背中に夕陽が当たっている。

○ 奥田家・LDK（夜）

スーパーの半額弁当を食べている慎太郎。里香はテレビを見ている。

いつも通り静かな部屋。

里香「……あっ」

慎太郎「ん？」

里香「今日、お義母さんがスーパーに来た」

慎太郎「うちの会社にも。何話した？」

里香「一緒にジュース飲んだだけ」

慎太郎「オレも昼メシを付き合っただけだ」

会話が無くなり、また沈黙。

そこに結が塾から帰って来る。

食卓にある弁当を取り、行こうとする。

慎太郎「今日、おばあちゃんと会ったか？」

結、無視して自分の部屋に入る。

○ 黒川探偵社・事務所（夜）

携帯で電話中の黒川。

黒川「（電話に）そりゃ、簡単には解決できませんよ。……それよりおねえさん、こちらの仕事の範囲を大きく越えてるんですが」
小金が頭を下げて帰っていく。

黒川「（電話に）怒鳴らないで下さい。他の手を考えましょう。不倫さえ片付けば大丈夫……そう、最後はそこに行きつきます」と明かりを消し、出ていく。

○ 路地

キョロキョロしながらふみ子が歩く。調査報告書の地図を何度も確認している。前方に『老婆の休日』が見えてくる。昼は喫茶店をしているようだ。

○ スナック『老婆の休日』・店内

大勢の客で賑わう店、入って来るふみ子。

キョロキョロしているとカウンター内で
一人で働いているアキと目が合う。

アキ「(ふみ子に) Bセット、お願い」

ふみ子「(自分を指さし) ウチ?」

アキ「あなた以外いないでしょ」

とプレートランチを渡す。

ふみ子「Bセットのお客様」

客2「ここだ」

ふみ子が運び、周りを見て空席を探す。

アキ「ボーっとしないで、食べ終わった皿も
さげる」

ふみ子「は、はあ」

と戸惑いながらも手伝う。

× × ×

エプロン姿のふみ子が働いている。

注文を受けたり、テーブルを片付けたり、
料理を運んだりと忙しい。

アキとの息は合っている。

○ 同・表

『休憩中』の看板が出ている。

○ 同・店内

ふみ子とアキがランチを食べている。

アキ「てつきりバイトの面接のヒトか。で
も、おかしいとは思ったの。40歳って聞
いてたのに」

ふみ子「今年、古希で悪かったな」

アキ「えっ、おばちゃん80!?!」

ふみ子「70歳や」

アキ「てか、これからもウチで働かない?

よかつたら夜でも」

ふみ子「夜ってホステス?」

アキ「年配の客が多いから、熟女も大歓迎」

ふみ子「ウチが働いたらホンマの『老婆の休

日』やで」

アキ「好きだった映画のダジャレを店名にし

たって、ママが言ってた」

ふみ子「ママって?」

アキ「ホントの母親。オープンしたのが還暦

だから、生きてたら（指折り数え）……ち
ようど70歳。おばちゃんと一緒にじゃん」
ふみ子「うちはまだ69。でも、アンタのお
母さんなら面白いヒトやったやろうな」
アキ「シングルマザーなのに明るくて、お客
さんみたいなのタイプだった」
ふみ子「それがウチ、客でもないねん」
アキ「じゃあ、何者？」
ふみ子「いつも息子がお世話になってます」
と頭を下げる。
アキ「（察して）……そういう事」
ふみ子「うん、そういう事」
アキ「ヒトの旦那に手を出しても幸せになれ
ないよ的なアドバイス？ それとも脅し？」
ふみ子「あの方やな」
アキ「残念だなあ、お義母さんとは気が合い
そうだったのに」
ふみ子「お義母さんと呼ぶんは」
アキ「馴れ馴れしいわね」
ふみ子「しかし東京に引っ越ししてきて、会
話がこんなに弾んだんは初めてや。息子と
別れても友達にはなれるんちゃう？」
アキ「友達じゃなく、親子になれるかも」
ふみ子「えっ……」
アキ「（笑って）冗談冗談」
笑えず顔が引きつるふみ子。
アキ、冷蔵庫から瓶ビールを持って来る。
ふみ子「お昼から飲むん？」
アキ「今日は特別。少しだけどう？」
ふみ子「ほな、一杯だけ」
アキがビールを注ぎ、グラスを合わせる。
ふみ子・アキ「乾杯」
ふみ子「息子のどこが良かったん？」
アキ「ラッセルクロウほかった」
ふみ子「それ、デザートか？」
アキ「ハリウッド俳優。初めてここに来た時、
お酒を飲む横顔がそっくりだった。渋くて
いい男だなって」
ふみ子「ウチには、うだつの上がらんセント
バーナードにしか見えへんで」

アキ「(笑いながら) それガチで似てる。てか、同居じゃなく一人暮らしでしょ」

ふみ子「あの子らの家は狭いから」

アキ「物置になってる部屋があるって聞いてたけど」

ふみ子「口では『一緒に住むか?』て言うけど、本気かどうかからんで」

アキ「奥さんとも相談した?」

ふみ子「こういうのは話しづらい」

アキ「家族なのに遠慮するの?」

ふみ子「家族やから」

アキ「そんなもんかねえ。アタシは好きなヒトの親と一緒に暮らしたいけどなあ。(ニヤリとして) 息子、嫁選び間違ったなあ?」
曖昧にうなずくふみ子。

○ 株式会社カウカウ・企画営業部(夜)

慎太郎が残業をしている。

スマホが鳴り、出る。

慎太郎「(電話に) 今日は行けそうにない……え! 分かった、すぐ行く」

○ スナック『老婆の休日』・店内(夜)

高齢者がカラオケで盛り上がっている。

ふみ子はソファで酔い潰れ、アキが介抱している。

慌ててやって来た慎太郎、言葉を失う。

アキ「自分からガンガン飲んでやって。止めただけど遅かったみたい」

慎太郎「……なんで、母さんがここに」

アキ「説明長くなるから今日は連れて帰って」
慎太郎「(ふみ子を見つめ) ……」

○ 同・表(夜)

タクシーが停まっている。

慎太郎とアキが、ふみ子を車に乗せる。

アキ「頼んだわよ」

うなずいて慎太郎も乗り込む。

○ 走るタクシー・車内(夜)

後部座席のふみ子、目をつむっている。

慎太郎は隣で貧乏ゆすりをしている。

ふみ子「こっちまでイライラするから止め」

慎太郎「起きてたのか」

ふみ子「なんか言う事あるやろ？」

慎太郎「……別に」

ふみ子「なら、こっちが言わせてもらう。ア

ンタの家はどうなってるのや」

慎太郎「何が？」

ふみ子「嫁は家事を放棄、子供は口を利かん」

慎太郎「アイツは色々と疲れてる。結も思春

期で難しい時期なんだ」

ふみ子「その上、お前はゲス不倫か」

慎太郎「……」

ふみ子「深刻なんはみんなが家族に知らん顔

な事や。娘が学校でいじめられても平気か」

慎太郎「いじめ？ 結が？」

ふみ子「お前はそんなんも知らんのか」

慎太郎「二人とも大変だと思うが、パートも

学校もきちんとしてるから大丈夫だ」

ふみ子「ギリギリなんやで！」

慎太郎「オレだってそうだよ！」

ふみ子「……」

慎太郎「この話をしに会社まで来たのか」

ふみ子「こんな恥ずかしいの酔わんと言えん」

慎太郎「こっちに来て1か月ちよつとしか経

たたないのに、よく調べたな」

ふみ子「ウチをなめたらアカンで」

あきれる慎太郎。

ふみ子「大阪で生まれ育って69年。『一緒に

に住むか？』って一人息子に嘘でも言われ

たのはホンマ嬉しかった。あれ、お父さん

のお葬式の時やったな？」

慎太郎「前にもその話したよ」

ふみ子「それでも最後まで聞け」

慎太郎「……」

ふみ子「だが、なかなか決断できんかった」

慎太郎「実家だろ」

ふみ子「借金でいくら苦しくなっても家だけ

は手放さへんかった。小さい建売やけど、

ウチの宝物やった」

慎太郎「……」

ふみ子「あそこを売って、家財道具もほとんど処分した。悲しかったけど、東京には幸せな生活が待ってると思ってた」

慎太郎「結局、何が言いたいの？」

ふみ子「ウチは喋り相手もおらん、一人ぼっちや。大阪で孤独なんは平気やけど、家族が近くにおるのに孤独はツライ」

二人が黙り込み、シンとなる車内。

慎太郎「……それで終わり？」

ふみ子「こっちに來たんは大失敗や！」

やりきれない慎太郎、外を見る。

ふみ子も反対側の窓を黙って見つめる。

○ ふみ子の部屋・玄関（夜）

フラフラのふみ子と慎太郎が帰って来る。

ふみ子「もう大丈夫やから」

慎太郎「着替えられるか？」

ふみ子「介護されるのはまだ早い。下にタクシーも待たせてるやろ？」

慎太郎「風呂入るなよ。危ないから」

と背を向ける。

ふみ子「あっ」

慎太郎「（振り返り）なに？」

ふみ子「今日は迷惑かけた……ごめん」

慎太郎「ああ」

と出ていく。

いなくなると、ふみ子は「ウツ」と口を押さえてトイレに駆け込む。

嘔吐する音が聞こえてくる。

玄関には、くたびれたふみ子の靴が一足だけある。

○ 奥田家・結の部屋（夜）

暗い部屋。

ベッドの中でスマホを触っている結。

『結、ウザすぎ』『臭すぎ』『嫌われすぎ』

液晶の光で無表情な顔が浮かんで見えて

いる。

○ 同・LDK (夜)

テレビをつけたままソファで毛布にくるまり眠っている里香。
慎太郎が帰って来る。
テレビを消し、寝室に向かう。
里香の目がそっと開く。

○ 同・夫婦の寝室 (夜)

慎太郎が入って来る。
ベッドに腰かけ、携帯の留守電を聞く。
部下の声「明日の会議資料が変更になり、新しいのを送りました。ご確認お願いします」
ため息をつき、パソコンの電源をつけて仕事を始める。

○ ふみ子の部屋・1K

二日酔いのふみ子が頭痛薬を飲んでいる。
インターホンが鳴り、玄関に行く。
ふみ子の声「どうしたん？」
アキの声「あれから大丈夫だった？」
ふみ子の声「まあ上がって。狭いトコやけど」
アキの声「お邪魔です」
ふみ子がアキを連れて、戻って来る。
ふみ子「お茶は？」
アキ「いらない。(部屋を見渡し) コーヒー、家族は来る？」

ふみ子「昨日、慎太郎が来たのが引越した日以来やわ」

アキ「嫁や孫は？」

ふみ子「(首を左右に振り) ウチがあつちに行くから」

アキ「普通、向こうも来るんじゃない。こんな近いのに」

二人は窓外のタワーマンションを見る。

アキ「大きくて堂々としてる。でも建物がいくら立派でも居心地悪いなら出ていくわね」
ふみ子「……ま、座って」

ふみ子とアキが向かい合って座る。

ふみ子「でも、あれやな」
アキ「あれとは？」
ふみ子「アンタと会って少ししか経たんのに
心開いて話せる。家族とは全然やのに」
アキ「慎太郎とも？」
ふみ子「息子を名前で呼んでるん？」
アキ「学生時代みたいでいいって」
ふみ子「信頼されてるんやな」
アキ「今日も奥さんじゃなくアタシに頼むし」
ふみ子「親の生存確認までか」
アキ「元氣そうで何より」
ふみ子「あれが最後ならカツコ悪すぎやで」
アキ「ホントホント」
笑い合う二人。
ふみ子「アンタは忙しいヒトやな。喫茶店と
スナックして」
アキ「愛人もしてます」
ふみ子「おもしろい子や」
アキ「おカネを貯めてるんですよ」
ふみ子「店の改装でもする気？」
アキ「違います。夢がある」
ふみ子「夢？」
アキ「言いませんよ、言ったら叶わないから。
お義母さんは夢ある？」
ふみ子「こんな歳やからなあ」
アキ「何かあるつしょ？」
ふみ子「……あつた」
アキ「言わなくていい。慎太郎の夢はタワマ
ンのローンを払い終わる事だつて」
ふみ子「タワマン？」
アキ「タワーマンション」
ふみ子「ああ、隣のビルの影になる部屋な」
アキ「午後は陽が当たるみたい。でも会社の
人間には恥ずかしいから、何階か教えてな
いって。ステータスだけのタワマン住みね」
ふみ子「見栄張つて小っちゃい男やで。……
あつ、夢言うたら叶わんのとちゃうの？」
アキ「(笑顔で) ねえ」

○ 駅前

ふみ子とアキが駅に向かって歩く。

アキ「わざわざ送らなくても大丈夫なのに」

ふみ子「散歩がてら、ええから」

アキ「豪快なように見えて気遣いのヒト」

ふみ子「アンタもやる？」

アキ「やっぱり似てる。だから慎太郎はアタ

シの事を好きになったのかな」

ふみ子「(複雑な表情で)……」

駅に着くと、改札から幸せそうな家族連れが出て来る。

それを目で追うふみ子。

アキ「また店に来てね」

ふみ子「……ウチ、やっぱり言うタイプやわ」

アキ「何を？」

ふみ子「夢を」

アキ「じゃ、どうぞ」

ふみ子「息子の家族が幸せになってほしい」

アキ「……」

ふみ子「だから別れて。お願いします」

と深々とおじぎをする。

アキ「……」

ふみ子はじつと頭を下げ続ける。

何も言えないアキ。

○ 奥田家・LDK

ふみ子がキッチンで洗い物をしている。

その後ろで迷惑そうに立っている里香。

里香「(戸惑い) 私がやりますから」

ふみ子「暇で力があり余ってるねん……里香

さん」

里香「何でしょう？」

ふみ子「鬱やろ？」

里香「あのヒトから聞いたんですね」

ふみ子「息子に聞かんでも分かる。ウチも更

年期でなった経験があるから」

里香「そうなんですか」

ふみ子「あれは薬飲んだら一発やで」

里香「少し前までは飲んでたんですが」

ふみ子「なんでやめたん？」

里香「まあ」

ふみ子「病院に通ったら？」
里香「それも少し前までは」

ふみ子「なんで？」

里香「……」

ふみ子「言いたくないならええわ」

洗い物を終え、洗濯物を畳み出すふみ子。

里香「お義母さん、もう止めてください」

ふみ子「ウチは家事を50年近くやってきた。

やらんとカラダがウズウズする。家事中毒

やな。人助けやと思っせてやらせて」

里香「……」

ふみ子「明日、雨やから洗濯もしといた方が」

里香「ここ干すの禁止で乾燥機を使います」

ふみ子「そうなん」

ふみ子の手際の良さに、苛立つ里香。

○ 同・結の部屋

ふみ子が掃除機をかけている。

顔だけを部屋に出す里香。

里香「マンシヨンの理事会の打ち合わせがあるの」

ふみ子「いつてらっしゃーい」

里香「あまり触ると結に怒られますから、気を付けて下さい」

ふみ子「怒ったら声聞けてええがな」

里香、黙って去っていく。

壁のカレンダーをめくるふみ子。

6月28日に赤丸をして『引退試合 1

0時』と書かれてある。

掃除の手を止め、見つめる。

○ 株式会社カウカウ・1階ロビー

ふみ子が待っていると慎太郎が来る。

慎太郎「また昼メシ？」

ふみ子「アンタと食べたらマズなる」

封筒を差し出すふみ子。

慎太郎「何それ？」

ふみ子「ん！」

と目の前に出し、慎太郎が受け取る。
中を見ると200万円入っていた。

慎太郎「どうしたの、こんな大金」

ふみ子「生前贈与や」

慎太郎「死んでからでいいって」

ふみ子「ビットなんちゃって流行ってるな」

慎太郎「仮想通貨？」

ふみ子「あれで大損こいたやろ」

慎太郎「……どっちに聞いた？」

ふみ子「ウチは何でも知ってるねん。それで

穴埋めしとけ」

慎太郎「大丈夫なのかよ？」

ふみ子「今日は年金支給日や」

行こうとするふみ子、その肩をつかんで

止める慎太郎。

慎太郎「これ以上、家族の事に首突っ込むな。

母さんが来てからむちゃくちゃだよ」

ふみ子「ウチが来る前からむちゃくちゃやろ」

ふみ子が去ると、部長がやって来た。

部長「こんなトコで、サボりか」

慎太郎「部長がそろそろ戻られる頃かと」

部長「調子のいいやつだ。メシでもどうだ？」

慎太郎「ゴチになります」

部長「奢るなんてひと言も言っていないぞ」

笑顔で歩きだす二人。

慎太郎、封筒をポケットにしまう。

○ 塾・事務所（夜）

ふみ子と塾講師が話をしている。

塾講師「クラスも一番上で、このまま順調に

いけば志望校にも合格できます」

ふみ子「授業中の様子はどうですか？」

塾講師「真面目に受けてますよ。当てたら、

毎回答えられますし」

ふみ子「声出して？」

塾講師「はあ、声出してですが」

ふみ子「安心しました」

塾講師「何の事です？」

ふみ子「いえ、こつちの話ですわ」

ドアが開き、結が入って来る。

塾講師「おばあちゃんが迎えに来てくれたぞ」

背を向けて出ていってしまう結。

塾講師「おい、どこ行くんだ？」

○ 同・表（夜）

帰宅する生徒たちがいる。

結も帰ろうと自転車にまたがると、目の前にふみ子が立ちふさがる。

ふみ子「ウチを嫌いでも、これだけは聞いて。アンタ、いじめられてるな？」

結は行こうとするが、ふみ子が自転車のカゴを持って離さない。

ふみ子「最後まで聞き。お父さんやお母さんや先生。もちろん、ウチも助けられへん」

結「……」

ふみ子「自分でやるしかない。どんな手え使っても降りかかる火の粉を払うんや」

結、うつむき黙っている。

ふみ子「相手が諦めるまで戦うんやで。しつこく、しつこく、しつこく」

一枚の紙を塾のカバンに入れるふみ子。

ふみ子「どうしたらええか書いたから読み分かったか？」

結「……」

ふみ子「返事するまで行かさへんで。アンタはな、ウチの大事な大事な孫なんや！」

強引に自転車を動かし、結は去る。

○ 緑ヶ丘第五中学校・表（夜）

校門に、結の自転車が停まっている。

○ 同・校庭（夜）

誰もいないグラウンドで走っている結。

悩みをかき消すように、怒りを発散するように、歯を食いしばって全力で駆ける。

息が続かず、苦しそうに地面に転がる。

仰向けになって激しい呼吸で上下する胸、全身から汗がしたたっている。

少し落ち着き、カバンから紙を出す。

ふみ子の手書きの文字だ。

『いじめは犯罪 きちんと証拠を集める。悪口は「侮辱罪」、モノを盗むのは「窃

盗罪」モノを壊されたら「器物破損罪」途中で読むのが嫌になり、クシヤクシヤに丸めて投げ捨てる。見上げると月がぼっかり浮かんでいた。

○ 食品スーパー・表

『大売出し』の旗が風になびいている。店に客がどんだん吸い込まれていく。

○ 同・店内

レジに行列ができ、忙しく働いている。里香のところに店長が来る。

店長「無理言って、早い時間から悪いね」

里香「……」

店長「駅前のロータリーにパクチー料理の店ができたの知ってる？」

里香「……」

店長「（小声で）仕事終わりにどう？」

里香「さつきから邪魔です」

店長はしぶしぶ去っていく。

顔色が悪く、脂汗が額から流れる里香。

めまいがし、その場に座り込んでしまう。

隣のレジからパート仲間が駆けつける。

パート「奥田さん……奥田さん！」

ぐったりとして、里香は反応しない。

慌ててやって来る店長。

店長「（パートに）早く救急車呼べ！」

○ ふみ子のマンション・表／国道

部屋着のふみ子が飛び出して来る。

路地を抜け、国道沿いの歩道を走る。

タクシーがやって来た。

手をあげるが行ってしまう。

ふみ子は息が苦しく一旦立ち止まる、だがすぐに駆け出す。

そこにタクシーが来た。

今度は道路に出て、止める。

そして乗り込み、タクシーは走り去る。

○ 緑ヶ丘総合病院・1階ロビー

ふみ子が大急ぎでやって来る。
笑顔で待っていた里香。

里香「すみません、わざわざ来ていただいて。
ただの貧血でした」

ふみ子「(拍子抜け) そう……精密検査は？」

里香「してません」

ふみ子「この際、ちゃんと調べて貰おう」

と里香の腕を取り、行こうとする。

里香「無理なんです」

ふみ子「面倒臭がらんと」

里香「私できないんです」

ふみ子「お金で困ってるんか？」

里香「いいえ、妊娠してるので」

ふみ子「へ？」

里香「今、5か月目。それも双子でした」

ふみ子、驚いて固まる。

里香「妊娠には気づいてましたが、双子なんて私も驚いちゃいました」

うなずくのがやっとのふみ子。

里香「お腹空いてませんか？」

○ ファミリーレストラン・店内

ふみ子が一人で食事をしている。

向かいの席に里香のカバンが置いてある。

それがパタンと倒れ、床に落ちる。

拾うふみ子、カバンの中に離婚届が入っ

ていた。里香の欄は全て埋まっている。

トイレから戻って来る里香の姿が見えた。

急いでカバンを直し、席に座る。

里香も椅子に腰をおろす。

ふみ子は誤魔化すように喋り出す。

ふみ子「高齢出産で双子となったら大変やで。

ウチもできる限り手伝うわ」

里香「お義母さんも心臓が悪いらしいじゃないですか」

ふみ子「大した事あらへん。ウチに任しとき」

里香「……私、決めたんです」

ふみ子「もしかして離婚？」

里香「なんで分かったんですか？」

ふみ子「ババアの勘やわ」

里香はふっ切れた表情になる。

里香「慎太郎さんは不倫をしています」

ふみ子「(大げさに)ま、まさか息子が!」

里香「本当なんです。それに借金まである。

なぜか最近、返済できたみたいですが」

ふみ子「……」

里香「一切、相談もしないでそんな事するなんてホントに夫婦なんですかね?」

ふみ子「あの子にも色々あるんちゃう?」

里香「今日も病院に來なかつたし」

ふみ子「忙しいからウチに行くよう電話がかつてきたんよ」

里香「妻が救急車で運ばれたのに來れないものでしょうか? 一緒に暮らしていくのはもう無理です」

ふみ子「不倫、借金、今日でスリーアウトか」

里香「いいえ、一発レッドカードです」

ふみ子「女問題はキツイわなあ」

里香「いえ、病院に來なかつた方」

ふみ子「そつち?」

里香「お義母さんみたいに着の身着のまままで来てくれたら、どんなに嬉しかったか。今

までの事を全て許せたと思います」

ふみ子「そうなんや」

里香「あのヒトも優しいトコあつたんですけどねえ。(スマホを確認して)今では連絡

すらありません」

ふみ子も携帯電話を見るが着信はない。

里香「離婚も出産も決心できました」

とバクバク食べ始める。

ふみ子は完全に箸が止まつてしまう。

里香「(お腹を撫で) 本当にあの人の子かしら」

ふみ子「で、店長とそんな仲やつたん!」

里香は驚き、そして大笑い。

ふみ子「(大声で) 笑わんと、はっきり言うてみ!」

里香「私だって相手選びます。大声で心臓止まるかと思いましたがよ」

にこやかな里香、顔が赤くなるふみ子。

近くの席の小さな子供が騒ぎ始める。

里香「(子供を見て)昔はうちも休日のたびに外食をしました」

ふみ子「へえ」

里香「結は小学生の頃よく喋る子で、あの人も家族サービスを喜んでしてくれました。

どこでどう間違えたのか……」

二人、黙り込む。

○ 奥田家・LDK (夜)

里香とふみ子の向かいに座る慎太郎と結は目を見開いてびっくりしている。

慎太郎「妊娠5か月で双子。その上、離婚か。情報量が多すぎて頭が追いつかん」

隣の結もうなずく。

里香「私は喋ったら、すつきりしちゃった」

慎太郎「……スケジュールにはどうなる？」

里香「予定日が9月。離婚は結が高校へ入学してからでいいんじゃない？ それまでは今と何も変わらないわ」

三人は返事ができず沈黙する。

○ ふみ子の部屋・1K

朝なのに天気が悪く、薄暗い室内。

布団の中でぜん息発作のようなゼーゼー

と苦しそうな呼吸をしているふみ子。

青白い顔で、体を丸めて耐えている。

○ 奥田家・LDK

慎太郎が新聞を読んでいる。

里香は、はりきって家事をこなしている。

その様子が気になり、話しかける慎太郎。

慎太郎「結はまだ起きてないのか？」

里香「もう朝の部活へ行ったわ」

テーブルに携帯電話が置いてある。

慎太郎「これ、誰のだ？」

里香「お義母さんが忘れて帰っちゃったの」

慎太郎「あ、あの、不倫の事だが……」

里香「(明るく)不倫がどうしたって？」

慎太郎「昨日、聞いたのか？」

里香「え？」

慎太郎「母さんにだ」

里香「お義母さん、知ってらしたの？」

慎太郎、しまったという表情になる。

○ 緑ヶ丘第五中学校・校庭

朝練で女子陸上部が走っている。

その中に結の姿はない。

○ 同・女子陸上部の部屋

結、一人だけがいる部屋。タオルでランニングシューズを懸命に拭いている。

『キモい』とマジックで落書きされているのだ。

いくらこすっても消えないので、カバンからペンを出して黒く塗りつぶす。

泣きそうになるがそれを履いて出ていく。

○ 株式会社カウカウ・喫煙室

タバコをふかす部長の前に立つ慎太郎。

慎太郎「お話というのは？」

部長「北海道へ行ってほしい」

慎太郎「出張ですか？」

部長「3年の予定だ。まだ正式ではないが」

慎太郎「転勤……ですね」

部長「分かっているとと思うが、うちは基本的に単身赴任になる。どうしてもと言うなら、

家族で行けるよう上と掛け合ってもいいが」

慎太郎「マンションを購入したので……」

部長「そうだっけ。(ニヤニヤして)じゃあ、

向こうで羽伸ばし放題だな」

慎太郎「……」

部長「戻って来たら席は用意しとく」

慎太郎「信用していいんですか？」

部長「私が嘘つくと言うのか！」

慎太郎「決して、そういう意味では」

タバコを押し潰し、部長は出ていく。

慎太郎「申し訳ございません」

部長に付いていく慎太郎。

○ ふみ子の部屋・1K

お茶を飲んでいるふみ子と里香。

机にはふみ子の携帯電話がある。

ふみ子「わざわざごめんな」

里香「パートに行くついでですから」

ふみ子「いつまで働くん？」

里香「シフトが決まってるところまでは」

ふみ子「収入が減るから節約しなアカンな」

里香「(笑顔で) 何とかありますよ」

ふみ子「(里香の顔を見て) 元気そうやね？」

里香「はい、夜もぐっすり眠れるようになった。
(寝巻姿を見て) お義母さんこそ、こ

んな時間まで寝てたんですか？」

ふみ子「昨日、遅かったから」

里香「(時計を見て) そろそろ行きますね」

と出ていこうとして、振り返る。

里香「不倫、ご存じだったんですね？」

ふみ子「……」

○ ふみ子のマンション・表

空は曇っている。

里香が自転車をまたぐと、ふみ子が来る。

ふみ子「自分の息子やから黙ってたワケやないねん。二人のため、いや家族のために。

会ったのもつい最近で」

里香「会った事まで……そうですか」

ふみ子『『そうですか』って何やの。前から

思ってたけど、アンタは冷たいトコあるで」

里香「今、言うタイミングですか」

ふみ子「ちよūdいいい機会ちゃう？」

肩で呼吸をし、喋りづらそうなふみ子。

里香「息苦しそうですけど、大丈夫ですか？」

ふみ子「こ、興奮してるんや」

里香「すみません、もう時間がなくて」
と自転車去る。

○ 路地

里香の自転車が通り過ぎる。

ふみ子の声「話しはまだ終わってへんでー」
追いかけて来るふみ子。

だが、またゼーゼーとぜん息になり、
なく地面にへなへなと座り込む。

そのふみ子の前にバイクが止まる。

ヘルメットを脱ぐと、小金だった。

ふみ子「(息も絶え絶えで) メ、メガネ君」

小金「コ・ガ・ネです。何してるんです？」

ふみ子「遊んでるように見えるか」

小金「では、どうされました？」

息が苦しく話せなくなるふみ子。

ポツポツと雨まで降り出した。

○ 緑ヶ丘総合病院・団体病室

ふみ子は鼻に酸素吸引器のチューブを繋
がれ、ベッドで正座している。

見下ろすように黒川と医師がいる。

ふみ子「泣きつきました。すみません」

医師「もう大丈夫ですが、これからの事をよ
くお考えください」

と去っていく。

ふみ子「アンタらにも迷惑かけてもうて。メ
ガネ君に助かったて言うといて」

黒川「次からは別料金を頂きますから。で、

手術はされるんですか？」

ふみ子「近々、せなアカンやろうな」

黒川「だから家族の事を急いでたんですね」

ふみ子「まあ、それもあるけど」

黒川「病気以外にも理由が？」

ふみ子「よう当たる占い師に、今年中に家庭
の問題を片付けたら運が開けるって言われて」

黒川「またご冗談を」

ふみ子「それも少しはあるねん」

黒川「ご家族には、私から伝えましょうか？」

ふみ子「いや、ウチがあとで」

黒川「(スマホを出し) 今してください」

ふみ子「番号が」

黒川「(さえぎり) 入ってます」

ふみ子「恐ろしいヒトやで」

とスマホを受け取るが、かけるか迷う。

黒川「連絡するまで帰りませんよ」

ふみ子「……探偵さんの言う通りやった」

黒川「何がです？」

ふみ子「幸せな家庭なんかどこにも無いわ」

黒川「……」

窓の外はザーザーと雨が降り、タワーマンションが霞んでいる。

○ 緑ヶ丘第五中学校・教室

給食の時間。

生徒たちはグループになって食べている。

美咲は生徒1と2と盛り上がっている。

結が教室に入ってきて、美咲のグループに加わる。

すると会話が途切れてしまう。

結、黙々と料理を口に運ぶ。

○ 駅・ホーム

雨は止んでいる。

ベンチで、思案顔で電車を待つ慎太郎。

そこにベビーカーを押した母親が来る。

突然、赤ちゃんが泣き出した。

上手にあやす母親、すぐ笑顔に戻る。

慎太郎「うまいもんですね」

母親「慣れてますから。上に双子がいるんで」

慎太郎「双子ですか……。やっぱり2倍大変ですか？」

母親「3倍も4倍もです。私一人ではとても

無理でした。家族の助け、特に夫が頑張っ

てくれて。父親として当たり前ですがね」

慎太郎「……」

母親「その分、喜びも大きいですよ」

いつの間にか赤ちゃんは眠っている。

頭を軽く下げ、歩きだす慎太郎。

スマホを出して、どこかにかける。

慎太郎「(電話に) 今日会社に戻らん。何かあったら連絡くれ」

○ 奥田家・LDK (夕)

里香が簡易血圧計で測っている。

ピピッと鳴り、見る『151 103』

里香「あっ」

スマホ画面に映る『妊娠中毒症・妊娠高血圧症』の数値を越えている。ショックを受ける里香の顔に西日が当たり、真っ赤に染まっている。

○ 緑ヶ丘総合病院・団体病室（夜）

周りをカーテンで閉められたベッドにいるふみ子。

隣からお見舞いに来た家族連れの賑やかな声が聞こえてくる。

娘 「おばあちゃんがないと家が暗いの。

早く帰って来てね」

夫 「お前は小遣いが欲しいだけだろ」

妻 「私もたまに貰ってるわ」

夫 「ママまでか。母さん、オレにもくれよ」

祖母 「アンタにはあげない」

笑いが起こる家族。

ふみ子は天井をじっと見つめている。

○ 奥田家・LDK

初夏の朝陽が差し込む室内。

パソコンで仕事をしている慎太郎。

里香は拭き掃除をしている。

相変わらず会話は無い。

テレビから動物園でゾウが出産したニュースが流れる。

―ス―が流れる。

それを見て、目を潤ませ応援し出す里香。

里香 「ガンバレ。ガンバレ、花子」

慎太郎 「（驚き）……」

里香 「そう、そこでいきんで。もつと！」

慎太郎、そーつと家を出ていく。

○ 緑ヶ丘第五中学校・女子陸上部の部屋

美咲たちがこそこそ話し、笑っている。

切り刻まれたランニングシューズを持ち、

震えている結。

そこにノックをして教師が入って来る。

教師 「早く練習を始めろ。明日が中学最後の

試合なんだぞ」

美咲 「結がお腹痛くて休みらしいで―す」

部員たちがニヤニヤしている。

教師「(結に) 体調管理くらいきちんとしろ」

結「(うつむき) ……」

教師「最近はタイムも良くなつて、もう少し粘ればキャプテンにも勝てるのに。あとは気持ちの強さだけなんだぞ」

静まり返る部室。

結が教師の前に行く。

教師「どうした？」

みんなが息を飲んで、注目する。

結「(何も言えず) ……」

教師「よし、練習開始だ。グラウンドに行くぞ」

ぞろぞろ出ていく部員たち。

一人残された結、悔しくて涙があふれる。

○ 奥田家・LDK

里香が出掛けようと玄関へ行くと、結が帰ってきた。

里香「あら、早退？」

黙ったまま自室に入ってしまった結。

里香、結の部屋の前に立つ。

里香「ママ、病院に行くから。具合悪かったら薬飲みさいよ」

返事は無い。

里香は玄関に戻り、靴を履く。

そこへ結がやって来た。

里香「どうしたの、どこ悪いの？」

首を横にふる結。

里香「じゃあ、何？」

結「……」

里香「時間ないから一緒に来て」

里香、結の手を取って出ていく。

○ 緑ヶ丘総合病院・団体病室

ふみ子が荷物を片づけている。

外から勢いよくカーテンが開けられ、ア

キが入って来た。

アキ「あれ、もう退院？」

ふみ子「誰にも喋るなつて言うたのに、バカ息子め」

アキ「そのバカ息子と別れた」
ふみ子「えー」

アキ「離婚するのに、フラれるなんておかしな話よね」

ふみ子「すみません」

と頭を下げる。

アキ「お義母さんに謝られても。……慎太郎、転勤になるんですよ。それも北海道の端に」

ふみ子「えー」

アキ「さっきから『えー』ばっかり」

ふみ子「あの子に何も聞いてへんで」

アキ「左遷ね。会社のために必死に働いてたのに、責任を取らされたみたい。ホント、

ロスジェネはかわいそう」

ふみ子「ロスジェネ？」

アキ「慎太郎の年代。受験勉強は大変な時代で、就活は超氷河期。会社に入ったらリーマンショックとサイアクな人たち」

ふみ子「アンタは違うんか？」

アキ「アタシは見ての通り、ゆとり。あつ、

これ売店で買ったから」

とイチゴ大福を渡す。

ふみ子「ウチの大好物や」

アキ「スイーツの好みまで合う」

ふみ子「そのスイーツみたいな俳優」

アキ「ラッセルクロウ？」

ふみ子「テレビで見たけど、慎太郎の方が男前やったで」

アキ「ないない」

○ 緑ヶ丘総合病院・1階ロビー

ふみ子が自動会計で支払いをしている。

隣にはアキが立っている。

里香の声「あら、どうしました？」

振り返ると、里香と結がいた。

ふみ子「えー！」

アキ「今日、三回目の『えー』が出た」

里香「(アキを見て) お知り合いの方？」

ふみ子「(取り乱し) ちゃうちゃう、これはちゃうねん」

里香とアキ、見つめ合いすぐに察する。
里香「ああ、この派手なヒトがそうなの」
アキ「この地味なのが奥さん。(結を見て)
で、アンタが慎太郎の娘か」

結「……」

火花散る里香とアキの視線。

ふみ子は目が泳ぎ、うろたえる。

○ 株式会社カウカウ・企画営業部

慎太郎が、部下に説教をしている。

机には『女子杖』という企画書がある。

慎太郎「何回言うと分かる。うちはジジババ
がメインターゲットだ。女子力などいらん」

部下「高齢者とはいえ女性ですからカワイイ
絵柄だと」

慎太郎「(企画書を捲りながら) ハートやリ

ボンの柄は分かるがこのクロスはマズいぞ」

部下「定番のデザインじゃないですか？」

慎太郎「十字架だぞ。死を連想するだろうが」

部下「はあ」

慎太郎『はあ』って、お前なあ。というか、

通販で杖なんか売れんのか？ 売上は前年
をずっと下回ってる。そろそろヒットを出

さんと」

部下「アマゾンで似た商品が半値で売ってる

んですよ。いくら頑張ったって」

慎太郎「理屈を言うなよ」

部下「失敗したらここの責任で、成功は上の
手柄。部長なんてセコい横領までしてます。

ホント、むかつかますよ」

慎太郎「そんな正論が通用する会社だと思っ
てんのか？ だから、お前は甘いって」

慎太郎の携帯が鳴る。

部下「電話です」

慎太郎「誤魔化すな」

部下「さつきから何度も鳴ってますけど」

慎太郎「(電話に出て) 仕事中に電話するな
って……えっ……ああ、そうだな(切る)」

と強張った表情で立ち上がる。

慎太郎「ちよつと出掛ける」

部下「新商品、今決めないとヤバイですよ」
慎太郎「それでいい」

部下「マジっすか？」

弱々しくうなずき、出ていく慎太郎。

○ 緑ヶ丘総合病院・カフェテリア

ふみ子とアキ、向かい合って里香と結が座っている。

ピリピリした緊張感が張りつめている。

ふみ子「結は関係ないから話が終わるまで、どっかに行ってた方が」

結もうなずき、立とうとするが腕をつかんで立たせない里香。

里香「この子も来年は高校生、半分大人です。自分の父親の本性を知りたい機会です」

ふみ子「本性って」

里香「それに結がいないとそちらが2、こちらは1になってしまいます」

ふみ子「ウチはどっちの味方でもあらへん」

里香「へえ、お義母さんは嫁の肩を持たないんですか？」

ふみ子「いや、そういう意味やなくて」

噴き出して笑うアキ。

里香「そんなに面白い？」

アキ「そりゃ、もう」

里香「何が？」

アキ「奥さんが間違ってるから」

里香「どこがよ？」

アキ「慎太郎もアタシの方だから、こっちは3ね」

ふみ子「また、そんな煽るような事を」

里香「あんな男、あなたに差しあげます」

アキ「いらない」

里香「人から取って、いらはないでしょ」

アキ「取ってない、あつちからノココ来た」

里香「どっちにしても、いらないから！」

アキ「アタシも！」

二人が喋るたび、右へ左へと顔が動くふみ子と結。

里香とアキが立ち上がり、にらみ合った

状態で近づていく。

ふみ子と結は間に入り、必死で止める。

周りのヒトたちもチラチラ見ている。

そこに、そーっと店に入つて来る慎太郎。

ふみ子が気づき、駆け出した。

そしていきなり慎太郎を殴りつける。

カフェにいる全員が唖然となる。

倒れた慎太郎に、ふみ子は蹴つたり殴つ

たり暴力を振るい続ける。

手で頭をかばい亀になつて耐える慎太郎。

ふみ子「アンタがアホやから、こんな事にな

るんや！ お母さんは恥ずかしい！ ウチ

が殺したる！ 観念せえ！」

慎太郎「助けてくれー」

アキ「ここ病院ですよ」

と止めるが、逆に突き飛ばされる。

里香と結も仲裁に入るが、ふみ子の怒り

は収まらない。

○ 走っているタクシー・車内（夕）

後部座席に慎太郎とアキが乗っている。

慎太郎の顔はすり傷がたくさんあり、唇

も切れて血がにじんでいる。

アキ「（運転手に）この先のショッピングモ

ールで止めて下さい」

運転手「承知しました」

車内が静かになる。

慎太郎「（唇を触り）会社に戻んなきゃいけ

ないのに、なんて言ったらいいんだ」

アキ「愛人と別れ話でトラブったと言えば？」

慎太郎「（すり傷を触り）いてっ！ ふざけ

やがって、あのバカ」

アキ「バカはてめえだろっ！」

慎太郎「いきなりなんだ？」

アキ「あの状況で、お義母さんが暴れる以外

は収まらん。ホント、頭がいいとアタシは

つくづく感心したよ」

慎太郎「……」

アキ「あんな姑なら、上手くやれたと思う。

しかしあの賢い母親から、こんなクズがよ

く生まれたわ」

慎太郎「オレは親父似だ。あのヒトも家族に迷惑ばかりかけてた」

アキ「それでも慎太郎よりはマシ」

慎太郎「同じようなもんだろ」

アキ「(首を横に振り) アンタは嫁に逃げられた。お義父さんは死ぬまでお義母さんに愛されてたの。慎太郎が一番クソつて事」

慎太郎、言い返そうとアキの方を見る。

すると涙をポロポロこぼしていた。

慎太郎「(驚き) ……」

タクシーが止まり、ドアが開く。

アキ「……奥さんがうらやましかった。アタ

シには、家族が一人もいないのよ」

と降りていく。

慎太郎、何も言えない。

○ 緑ヶ丘総合病院・個人病室(夕)

ベッドに里香が腰をかけ、ふみ子と結はパイプ椅子に座っている。

里香「三日間、ここを出ちやいけないなんて」

ふみ子「まあ、カラダを休めると思ってた」

里香「すみません、色々と迷惑かけまして」

ふみ子「ウチが一番かけたで」

笑みを浮かべる里香と結。

窓の外のタワーマンションに目を向ける

三人、各部屋に明かりが点き始めている。

ふみ子「……そろそろ、帰るか」

里香「結の事、お願いします」

ふみ子「心配せんとゆつくり休み」

帰っていくふみ子と結。

○ ファミリーレストラン・店内(夜)

メニューを見ているふみ子。

結は何か言おうとしている。

ふみ子「どれ頼んでもいいで(メニューを見

せ) 指さしてみ。二つでも三つでも」

結「……」

ふみ子「じゃあ、先にウチが決めるわ」

結「お……」

ふみ子「お？」

結「お金」

ふみ子「お金が欲しいん？」

コクンとする結。

ふみ子、財布から3万円出して渡す。

1万円だけを取り、返そうとする結。

ふみ子「ええ、取るとき取るとき」

結が急に立ち上がる。

ふみ子「どっか行くんか？」

うなずき、結は慌てて出ていく。

○ 奥田家のタワーマンション・表（夜）

缶ビールを開ける音がする。

○ 奥田家・LDK（夜）

ふみ子がソファでビールを飲みながら、
新聞を捲っている。

数本の缶ビールを空け、ほろ酔い状態だ。

ふみ子「（独り言）何が妊娠5か月や。やる

事やとるがな。共通の友人の結婚式で酔

った勢いって。記憶なくなってるのに、下

半身だけは気の合う夫婦やで」

ふみ子、気配を感じて振り向く。

買い物袋を持った結が立っていた。

ふみ子「（驚き）い、今の聞いてた？」

結、うなずきお釣りを渡そうとする。

ふみ子「（受け取らず）ええって。それより

心配するがな。突然、出ていって」

結「……」

ふみ子「でも嬉しかったんで。お父さんやお

母さんやなく、ウチを頼ってくれた事が」

結「……」

ふみ子「何が欲しかったか知らんけど、あんな

たにとつて必要なモンやろ。大事にしてく

れたらおばあちゃんは幸せや」

お釣りを置き、頭を下げて部屋に戻る結。

ふみ子「……あの子がしつこいのは遺伝やな」

○ 奥田家のタワーマンション・エントランス（夜）

高級ホテルのような雰囲気。
顔に絆創膏をいくつも貼った慎太郎がエ
レベーターに乗り込む。

○ 同・エレベーター（夜）

慎太郎が『3』を押し、ドアを閉めよう
とすると住人が次々と乗って来た。
そして、みんな高層階のボタンを押す。
エレベーターが動き出す、すぐ3階に着
きドアが開く。
恥ずかしそうに降りる慎太郎。

○ 奥田家・LDK（夜）

薄暗い中、ソファで毛布を被り眠ってい
るふみ子。

帰宅してきた慎太郎、違和感を感じてソ
ファを覗く。

するとふみ子が目を覚ます。

慎太郎「（驚き）うわっ！」

ふみ子「親をお化けみたいにビククリしな。

里香さんは入院や」

慎太郎「そんなに悪いのか？」

ふみ子「詳しく検査するだけ。（絆創膏を指

さして）会社でなんか言われたか？」

慎太郎「嘘考えるの面倒だから、正直にオン

ナ関係で揉めたって答えたよ。そしたら、

課長も冗談言うんですねだって」

ふみ子「次、アホしたらそれではすまんぞ」

慎太郎、水を飲んで椅子に座る。

慎太郎「……親父が亡くなるまで、母さんは

苦勞の連続だったろ？」

ふみ子「商売は失敗ばかり。いつもお金が

無くて、そら大変やったぞ」

慎太郎「親戚や知り合いからも借金して。そ

れでオレも私立の高校には通えなかった」

ふみ子「まだ根に持ってたのかいな」

慎太郎「そりゃそうだよ。あそこに行けてた

ら、もつといい大学に入って、もつといい

会社に就職して、もつといい人生がって」

ふみ子「あれ覚えてるか？ 幼稚園の頃、夜

遅くまで借金取りが家に来たの」

慎太郎「なんとなくは」

ふみ子「あのヒトラが帰るまで公園でアンタをおぶって時間を潰してた。お父さんが呼びに来てくれた時は嬉しかったなあ」

慎太郎「親父のせいで隠れてたのに、嬉しい

だなんて母さんもおかしいよ」

ふみ子「一生懸命やってたから、何も言えなかった」

慎太郎「だけど一度も儲けなかったな」

ふみ子「卑怯やズルは絶対せんかったから」

慎太郎「それじゃビジネスでは成功しない」

ふみ子「成功が目的やなかってん」

慎太郎「じゃあ、何のために商売してたの？」

ふみ子「家族を幸せにするためや」

慎太郎「そんなの聞いた事ないぞ」

ふみ子「苦労かけられたけど楽しい思い出もいっぱいある。アンタにもそうなって貰わな、ウチは死んでも死に切れん」

慎太郎「死ぬなんて大げさな。しかし親父は亡くなって何年も経つのに、それだけ思ってもらえてたら幸せ者だ」

ふみ子「お父さんは今でも（胸を叩き）ここに生きてるで」

慎太郎「息子の前で臭い事言うなよ」

ふみ子「ホンマやがな。アンタは逆や、嫁や

子供が近くにおるのに心にはおらんのや」

慎太郎「……」

ふみ子「家族の方にもいつも気持ちに向いてるか？ それをちゃんと伝えてるか？」

慎太郎「今さら遅い」

ふみ子「せやな」

と毛布を被り、目をつむる。

慎太郎「そんなトコで寝たら風邪ひくぞ」

ふみ子「（寝たふりで）……」

慎太郎「だらしな事するなって」

ふみ子「お前の隣で寝てほしいんか？」

慎太郎「勝手にしろ」

怒って寝室にいく慎太郎。

○ 空

雲ひとつない晴天。

○ 奥田家・LDK

早い時間から朝ごはんを作るふみ子。

焼き魚と卵焼きとみそ汁と和風だ。

ふみ子のカバンからアラームが聞こえる。

携帯を止めると、イチゴ大福が出てきた。

ふみ子「(手に取り)……」

慎太郎、目をこすりながらやって来る。

慎太郎「何時からガタガタしてんだ」

ふみ子「(小声で)あの店って」

慎太郎「何の店？」

ふみ子「(小声で)アキさんのや」

慎太郎「結も知ってるから小声じゃなくても」

ふみ子「(小声で)知ってても、親の恥は聞

きたくない。あそこは何時からやってる？」

慎太郎「(小声で)モーニングから」

ふみ子「(小声で)朝昼晩と働いて、いつ休

んでるん？」

慎太郎「(小声で)間に仮眠取ってるって」

ふみ子「偉いわぁ」

慎太郎「もう関わるなよ」

ふみ子「ウチの友達や、言われる筋合いない。

あつ、そうそう、転勤の方は決まったん？」

慎太郎「返事はしてないが、仕事だから上の

言いなりだな」

ふみ子「アンタは家族や愛人を捨て、会社の

ために生きるんか。ご立派な企業戦士やで」

慎太郎は不愉快な顔になる。

ふみ子「ウチ、ちよつと出掛けるから朝ごは

んは二人で食べといて」

慎太郎「こんな時間から、どこ行くんだ？」

ふみ子は何も言わず出ていく。

入れ替わるようにジャージ姿の結が来る。

慎太郎「今日もこれか？」

と走るジェスチャーをする。

うなづく結。

○ スナック『老婆の休日』・表

ドアに『臨時休業』の貼り紙がある。
ふみ子が中を覗いているとドアが開く。
アキ「(顔を出し) どうしたの、ふみ子さん」
ふみ子「ふみ子さん？」

○ 同・店内

ふみ子とアキだけの静かな店。

アキ「これからは友達同士だから、お義母さんじゃマズいかなって」

ふみ子「店は、なんでやめるん？」

アキ「お金も貯まったし、そろそろ自分の夢に歩きださないとって」

ふみ子「絶対、うまい事いくで」

アキ「何するか知らないのに？」

ふみ子「宇宙飛行士やったっけ？」

アキ「アメリカに語学留学」

ふみ子「すぐにペラペラやろな。若いから」

アキ「もう若くない」

ふみ子「これからは人生100年時代。30

代なんか、鼻たれ小僧や」

アキ「ホントの夢は違う」

ふみ子「留学は嘘なん？」

アキ「嘘じゃないけど、夢はもっと上にある」

ふみ子「ペラペラの上？」

アキ「映画の字幕をやってみたい。子供の頃からママと映画館行くのが好きで、それで

……。 (照れて) 初めて言っちゃった」

ふみ子「カッコええ夢やな。叶うで、アンタには根性がある。ごっつい金玉もついとる」

アキ「女なのに」

ふみ子「心の金玉や」

アキ「いい言葉、メモっとこ」

ふみ子「でも、せっかく友達になれたのにな。

出会いは最悪やったけど」

二人が笑い合う。

アキ「慎太郎と結婚してお義母さんと暮らせたら、チョー幸せだったかも。母親にできなかったった親孝行もできただろうし」

ふみ子「そう言っつて貰えるところしいわ」

アキ「奥さんが妊娠したと聞いて、戦う気は

無くなった。病院で悪あがきしたけどね」
ふみ子「離婚しても養育費とか、かかるから」
アキ「そんな男に未来はない」
ふみ子「その通りや。3人の子供にずっと払い続けるもん。あとマンションのローンも」
アキ「それでも頑張れるってアタシは伝えた。けど、向こうが無理だったみたい」
ふみ子「……」
アキ「アタシを本気で好きじゃなかったのね」
ふみ子「家族を言い訳に最後は逃げたか。…」
アキ「しかしアンタは元氣そうで良かったわ」
ふみ子「何の事？」
アキ「息子は離婚、その上、転勤。本当に一人ぼっちになっちゃう。大阪にいれば周りに友達がいて気も紛れたのに」
ふみ子「大丈夫、ウチは強いぞ」
アキ「慎太郎はホント頼りにならないなあ」
ふみ子「チンチン付けて産んでやったのに、ウチの育て方が悪かったわ」
アキ「ふみ子さんはいい親ですよ」
ふみ子「いい親ってなんやろ？」
アキ「いい家庭を作る」
ふみ子「いい家庭って？」
アキ「家族の居心地がいいところ」
ふみ子「そやな。あの子ら自身が決める事なんや。ウチの理想を押しつけてたわ」
少し間がある。
アキ「あと、エッチの時にゴムつけろってハッキリ言えるのもいい親ね」
ふみ子「正解。でも孫には言えんで」
アキ「あつ、昨日、あの子見た」
ふみ子「結？」
アキ「イライラしたから仕事休んでモールでヤケ買いしてたの。そしたら閉店時間ギリギリの店で、ランニングシューズを真剣に選んでた」
ふみ子「それ買いに行ってたんか……もしかして。(携帯の画面を見て) 今日、何日？」
アキ「28」

ふみ子の携帯画面には結の部屋のカレン
ダー画像が映っている。『6月28日
引退試合 10時』

ふみ子「えらいこっちゃ。(電話をかける)
……急ぎの仕事やで！」

○ 国道

歩道でキョロキョロと車を探すふみ子。

黒塗りの車が止まり、運転席の窓が開く。

黒川が乗っていた。

黒川「うちはタクシーじゃないんですよ」

ふみ子「可憐な年寄りの頼みやがな」

と乗り込む。

黒川「今回は料金が発生しますから。で、ど

こ行くんです？」

ふみ子「それが分からんねん。探偵さんなら、

どうにかなるやろ？」

黒川「どうにかなるワケないでしょ！」

○ 緑ヶ丘総合病院・個人病室

朝食中、電話に出ている里香。

ふみ子の声「あの子に連絡取られへんねん」

里香「(電話に) 学校にスマホ持っていくの

禁止なんですよ。先生には尋ねました？」

ふみ子の声「その手があったか、じゃ切るわ」

里香「(電話に) 待って。私も行くので迎え

に来てください」

ふみ子の声「病院が許さんで。お腹の子供も」

里香「(電話に) 結も私の子供です。娘が一

生懸命に走る姿を見ると決めました」

ふみ子の声「何でも突然決める嫁やで」

○ 株式会社カウカウ・喫煙室表

電話をしている慎太郎。

喫煙所の中では部長が待っている。

慎太郎「(電話に) アイツがそんな事を。よ

し、行ってやれ。オレも行く」

ふみ子の声「なんでアンタまで。仕事は？」

慎太郎「(電話に) そんなのどうにでもなる」

と切り、深呼吸をして喫煙室に入る。

○ 同・喫煙室

慎太郎が部長の前に立つ。

部長「転勤、正式に決まったから」

慎太郎「そうですか……」

部長「浮かない顔だな。別に君じゃなくても行きたいのはいくらでもいるんだぞ」

慎太郎「では、私はお断りします」

部長「何言ってるか分かってんのか！」

慎太郎「北海道に行つたつて、出世は無理でしよ。自分の行く末なんてもう見えてる。

そんなために家を空けられません」

部長「こっちはいい条件にするのに、どれだけ苦労したか。お前のためを考えてだな」

突然、笑い出す慎太郎。

部長「なんだ？」

慎太郎「マンション買うか何度も相談したの
お忘れだったじゃないですか。そんなヒト
が『お前のため』ですか？ 部長はいつも
『自分のため』でしよ」

部長「そんなのはもういい！ 断つたら、た
だじゃ済まさん」

慎太郎「好きなかだけやってください」

部長「本気だぞ！」

慎太郎「こつちも本気です。部長の不正なん
か山ほど知ってますよ。上にも外にもバラ
しますから、お気を付けてください」

部長「う、裏切者」

慎太郎「オレ、卑怯とズルは絶対に許せない
性格なんです」

と去っていく。

部長「……」

○ 緑ヶ丘競技場・場内

トラックに赤茶色のラバーが敷かれ、小
さなスタンドが一周する立派な競技場。
グラウンドで大勢の選手がストレッチや体
操をしている。

美咲たちはお喋りしながら楽しそう。

結は離れた場所の入念にやっている。

足元には新品のシューズ、表情は真剣そのものだ。

○ 緑ヶ丘総合病院・表

言い争う里香と看護師が出て来る。

看護師「服まで替えて、どこ行く気ですか」

里香「すぐ戻ってきますって」

看護師「検査はまだ途中です。あなたは赤ち

やんの命を預かってるんですよ」

里香「一度も忘れた事ありませんから！」

看護師「……」

里香が停まっているタクシーに乗ろうとすると、黒川の車がやって来た。

ふみ子「(窓から顔を出し) こっちこっち」

サッと乗り込む里香、走り出す車。

看護師「(黒川の車に) 何かあったら、すぐに救急車を呼んで下さい！」

○ 株式会社カウカウ・表

ネクタイを外しながら慎太郎が出てくる。

そこに忍び寄る男、腕をつかんだ。

慎太郎「な、なんだ！」

それは小金だった。

小金「おねえさんに頼まれました」

慎太郎「オレに姉なんかいない。お前は誰だ」

小金「こちらは存じてます。時間がないので」

とヘルメットを被せ、手を引いていく。

慎太郎「どこへ連れていく！」

○ 走る黒川の車・車内

後部座席にふみ子と里香がいる。

黒川は後ろの様子を伺いながら運転。

里香「ちょうど3年経ちました」

ふみ子「何が？」

里香「マンションを買ってです」

ふみ子「もうそんなに経ったの」

里香「私のわがままでした。小さい頃から転

勤族でずっと社宅暮らし。親を早くに亡く

したので、自分の実家は無くなりました」

ふみ子「……」

里香「だから、どうしても持ち家が欲しくて」
ふみ子「家が欲しいのはウチにもよう分かる」
里香「あのヒトは反対でしたが、私がローンの計画を立てたり、低い階なら安いとか、パートも増やして頑張るからと」

ふみ子「ずっと頑張ってるもんね」

里香「タワーマンションにこだわったのも世間体だけで」

ふみ子「見栄張るのが必要な時もある」

里香「しかし失敗でした。忙しくなったせいで鬱がヒドくなり、家族をないがしろに」
ふみ子「……」

里香「最初は家庭から笑顔が無くなり、次は会話、最後にはお互いの顔すら見なくなつた。あの家を守るのに必死で、肝心の家族を守れなかった」

ふみ子「アンタだけの責任やない」

静まり返る車内。

里香「妊娠が分かって、みんなが優しくなつた。旦那も娘も、お義母さんも。パートのヒトたちまで」

ふみ子「初めから優しく接してあげてたら」

里香「(さへぎり) 違うんです」

ふみ子「違う?」

里香「私が変わったから、周りも変わつてくれたんだと思います。以前は家族から逃げました。特に結からは反抗期を理由に」

ふみ子「どの親もそうやで」

里香「問題の原因は私。妻も母親も嫁も、全部失格だったんです」

ふみ子「そんな事あらへん、どれも悪くない。……けど、どうにもならん場合もあるねん」
少し間がある。

里香「これからは逃げません。家族と向き合えるようになったのはお義母さんのおかげ」
ふみ子「その結果、離婚にもなったけどね」

里香「(笑顔になり) ですね」

緑ヶ丘競技場が見えてきた。

しかし車のスピードが落ちていく。

黒川「ヤバい、あとちよつとで着くのに」

渋滞でついに車が止まった。

時間は9時50分。

ふみ子「もう始まるで」

バイクの音が遠くから聞こえてくる。

黒川がサイドミラーを見る。

小金のバイクが近づいてきた。

○ 緑ヶ丘競技場への道

渋滞している。

小金のバイクが黒川の車を抜こうとした

瞬間、ドアが開いてふみ子が飛び出す。

急ブレーキでギリギリ止まるバイク。

小金「死ぬ気ですか？」

ふみ子「降りろ」

と後ろに座る慎太郎を引きずり下ろす。

里香も車から降りて来る。

慎太郎「カラダは大丈夫なのか？」

里香「そんなのいいから」

とヘルメットを奪って、被る。

慎太郎「心配してやってるのに」

里香「今さら遅い！」

慎太郎「なんだ、その言い方は！」

ふみ子「揉めてる場合か。(小金に)行つて」

小金「人使い荒いです」

と里香を乗せ、バイクは競技場に向かう。

慎太郎「久しぶりにケンカしたよ」

ふみ子「手え出てからがホンマのケンカや」

慎太郎「オレらはどうすんの？」

ふみ子「もちろん走るがな」

駆け出すふみ子。

慎太郎「勘弁してよ」

とあとに続く。

ふみ子はすぐに息が切れ、うずくまって

咳き込む。

すると慎太郎がふみ子の前にしゃがみ、

背中を見せる。

慎太郎「乗れよ」

ふみ子「ええわ、少し休んだら」

慎太郎「(さっせぎり)早くしろって」

ふみ子「(迷い)……」

慎太郎「こんな親孝行しかオレにはできない。
頼むから乗ってくれ」

笑顔のふみ子が飛び乗る。

慎太郎、おんぶして競技場へ歩き出す。

慎太郎「ちよつとは痩せろ」

ふみ子「やかましい。それより、会社をほつ
たらかして平気なんか？」

慎太郎「仕事は完璧。社長になるまで長生き
しろよ」

ふみ子「120まで生きるで」

慎太郎「母さんは殺しても死なんか」

ふみ子「……しかしアンタにおんぶされる日
が来るとはなあ」

と感慨深い表情になる。

○（ふみ子の回想）公園（夜）

35年前の冬。

ふみ子が幼稚園児の慎太郎をおんぶして
公園内を歩いている。

家から借金取りがいなくなるまで時間を
潰しているのだ。

気温が低く、二人の吐く息は白い。

ふみ子「ごめんやで、もうちよつとの辛抱や」

公園入口に男性の姿が見えた。

ふみ子「（笑顔で）お父さんが来てくれたで」
だが慎太郎は眠っている。

○ 緑ヶ丘競技場への道

慎太郎、ふみ子をおんぶして速足で進む。

ふみ子「疲れたやろ？ もう降りよか？」

慎太郎「ワシに任しとかんかい」
と駆け出した。

ふみ子「アンタの関西弁、久しぶりに聞いた」

慎太郎「今のは親父の真似だ」

ふみ子「真似せんでもそつくり」

慎太郎「見た目は全然似てないだろ」

ふみ子「二人とも結婚式みたいな二枚目やで」

慎太郎「（笑顔で）……」

ふみ子「ええ嫁を貰ってくれて、ええ孫まで
育ててくれて、アンタは日本一の孝行息子

や」

慎太郎「そこまで言うとは嫌味だよ」

と生き生きとした表情で走る。

ふみ子は溢れる涙を慎太郎の肩でぬぐう。

○ 緑ヶ丘競技場・場内

観客はパラパラとまだらにいます。

1500m走の直前。

結や美咲など選手たちがスタートラインに並んでいる。

美咲「(結の靴を見て) 新しいの買ったんだ」

結「勝つためにね」

美咲「……」

パンとピストルが鳴り、走り出す選手。

結と美咲は真ん中に位置を取る。

スタンドに里香が着いた。

里香「結、ファイター！」

走っている結に聞こえ、スタンドを見る。

里香を見つけて驚いた表情になる。

その時、美咲がスピードを上げた。

ついていく結。

他のランナーは置いて行かれ、二人の先

頭争いになる。

そこに息を切らしたふみ子と慎太郎もス

タンドへやって来た。

慎太郎「その調子だ！」

ふみ子「一番なら焼き肉、連れてったるで！」

客が笑う。

結にも笑みがこぼれる。

ふみ子たち、結の走る姿をじつと見る。

里香「あの子、あんなに大きくなったのね」

慎太郎「ホントだ、成長期はスゴいな」

里香「違うわ、私たちがちゃんと結を見てな

かったから気付かなかっただけよ」

慎太郎「……」

ふみ子「(結を見て) 輝いてるわ」

慎太郎・里香「うん」

ふみ子「アンタらも、まだまだ輝けるねんで」

慎太郎・里香「(顔を見合わせ)……」

グラウンドで鐘が鳴る。

里香「ラスト一周よー！」

美咲がロングスパート。

離されないように結もスパート。

慎太郎「ベストを尽くせ！」

ふみ子「最後までしつこくや！」

またスピードを上げる美咲、結はそれでもついでいく。

二人は並んだ状態で、最後の直線に来る。ラスト50m。必死に腕を振り、歯を食いしばって走る両選手。

ふみ子たち、声を枯らして応援する。

ふみ子・慎太郎・里香「行けーっ！」

5m、3m、力強いフォームの結がわずかの差で先にゴールラインを越えた。

力尽き、大の字で倒れ込む二人。

大興奮のふみ子、慎太郎、里香。

負けた美咲の周りに部員が集まってくる。少しして結も近づく、みんなから冷たい視線を浴びる。

美咲「まぐれで勝ったからって調子に」

そこに教師が来る。

美咲「(手を差し出し) 優勝おめでとう」

結「……うぜー！」

とパンツと手を払いのける。

驚く教師と部員たち。

結「アンタたちがはじめた証拠は全部残している。次、何かしたらバラすから！」

美咲「……」

結「傷害罪は精神的に傷つけてもなるの。

時効は10年。あと、損害賠償も親に請求する。受験や就職も大変になるわよ」

沈黙する美咲たち。

結「(美咲に) 私のしつこいのは遺伝なの。分かった？」

美咲「(小さくうなずき) ……」

教師「いじめって、どういう事なんだ？」

美咲と部員はうつむき、黙っている。

結は競技場を去ろうと歩き出すとグラウンドにふみ子、慎太郎、里香が降りて来た。三人「おめでとう」「よくやった」「凄

かったわ」と揉みくちやに結を祝福。

それをスタンドで黒川と小金が見ていた。

黒川「幸せな家庭だな？」

小金「はあ」

黒川「おねえさんのおせっかいと凶々しさが家族を救ったんだ。あそこまで頑張れるヒトはそうはいないよ」

小金「でも、幸せは一瞬だけです」

黒川「一瞬でも素晴らしい。真空パックやフリーズドライで保存したいよ」

小金「(苦笑いで) 食品ですか」

黒川「お前には分からんよ。普通に結婚して、普通に子供ができて、普通の家庭を続けていく難しさを」

小金「普通ができない？」

黒川「できないできない」と背を向ける。

小金「料金貰うの忘れてますが」

黒川「いいの見れたからサービスにしとく」

小金「商売です。カッコつけないでいただきましょう。私の給料も遅れ気味ですし」

黒川「メガネ君はごちやごちやうるせーな」
去っていく黒川。

小金「呼び方はもう気にしませんが、お金はきちんとお願いします。ボーナスも一度は」
小金も行ってしまふ。

ランドではまだ奥田家が騒いでいる。
特にケラケラと楽しそうに笑うふみ子。

○ 食品スーパー・表

夏の強い陽射しが店に当たっている。

里香の声「お世話になりました」

○ 同・更衣室

ロッカーの荷物を大きな紙袋に入れて
る里香、お腹が少し目立つ。

店長とパート仲間も手伝っている。

店長「必ず戻って来てください」
笑顔でうなづく里香。

店長「(パートに) よし、仕事に戻ろうか」

みんな出ていき、里香は一人になる。
すると携帯電話が鳴る。

里香「(電話に出て)……はい、そうですが。
……えっ！ どういう事です？」

○ 株式会社カウカウ・企画営業部

電話に出ている慎太郎。

慎太郎「(電話に)……今から向かう」
と切り、硬い表情で出ていく。

○ 緑ヶ丘第五中学校・教室

休み時間。美咲たちのグループから離れて、ポツンと一人でいる結。

しかし表情は清々しい。

教師が教室に慌てて入って来て、結の耳元でささやく。

結「(シヨックを受け)……」

教師「早く行きなさい」

結、何も持たず教室を飛び出す。

○ 緑ヶ丘総合病院・霊安室

壁が真っ白な小さい部屋。

ふみ子の遺体が横たわっている。

穏やかな表情だ。

それを放心状態で眺めている里香と結。

里香「……眠ってるみたいね」

結「(うなずき)……」

慎太郎が紙袋を持って入って来る。

慎太郎「モールで買いた物中に倒れて、救急車が来た時にはもうダメだったらしい」

里香「手術が決まったのに遅かったのね」

慎太郎「脳溢血で突然死だ。心臓は関係ない」

里香「そう……。手術日って、お義母さんの

70歳の誕生日だったわよね」

慎太郎「ああ。親父が亡くなったのも70。

『手術で死んだらお父さんと同じ年やな』

て笑ってたんだが……」

里香「東京に来て、まだ3か月なのに」

慎太郎「こつちと呼んだのは間違いだった。

オレは本物の親不孝者だよ」

黙り込む三人。

結 「(紙袋を指さし) それは？」

慎太郎 「倒れたあともこれ離さなかったって」

結が中を覗くと、顔を覆って大声で泣き始める。

びっくりした慎太郎が商品を取り出す。

緑色のベビー服が二着入っていた。

慎太郎 「……」

里香 「……」

結 「おばあちゃんは死ぬ時までずっと家族のためを思ってた。なのに、私たちは何もしてあげられなかった」

泣く結を抱きしめ、里香も嗚咽する。

慎太郎 「自分はボロボばかり着てたのにな」

と涙をこぼし、ベビー服をギュッと握る。

霊安室にすすり泣く三人の声が響く。

○ ふみ子の部屋・1K

T 『2か月後』

9月なのに真夏のような暑い朝。

スーツ姿の慎太郎が仏壇に手を合わせる。

額に汗が浮かんでいる。

父親の遺影の隣にはふみ子もある。

○ 奥田家・LDK

里香と結が朝ごはんを食べている。

玄関から慎太郎が入って来て、席に座る。

里香 「遅刻」

慎太郎 「仕方ないだろ、歩いて5分かかる」

里香 「あそこにただで住ませて貰えるだけでも感謝しなさい。それに少し早く起きればいいだけでしょ」

慎太郎 「朝食を少し遅くすればいいんだ」

里香 「なんであなたに合わせるの。(結に) ア

ンタも早く食べなさい。今日から二学期よ」

結 「……」

慎太郎 「朝からうるさい女だな」

里香 「やっぱり離婚ね。別居してご飯だけ食べに来ていいって考えが甘かったわ」

慎太郎 「届けを早く持つて来い。来年まで待

たなくても、いつでもハンコ押してやるぞ」
そこに赤ちゃんの泣き声が聞こえてくる。

結 「ケンカするから」

里香と結が出ていき、双子を抱っこして戻って来る。

ふみ子の買ったベビー服を着ている。

赤ん坊を見た三人、パッと笑顔になる。

結 「(時計を見て) ヤバイ。これ、お願い」と赤ちゃんを慎太郎に渡す。

結 「行ってきまーす」

かばんを持ち、慌てて出ていく結。

里香 「あっ！」

慎太郎 「なんだ大声出して」

里香 「あの子、忘れ物。こっちもお願いな」

と赤ちゃんを渡し、行ってしまふ。

慎太郎 「おい、これじゃメシが食えんだろ」

ぎこちなく両腕で抱っこした双子がまた泣き出した。

頑張つてあやすが、余計にヒドくなる。

窓際の写真が一枚増えている。

産まれたばかりの双子を慎太郎、里香、

結が笑顔で囲む幸せそうな家族写真だ。

『五人家族 初日』と書かれてある。

○ 奥田家のタワーマンション・階段

結が息を弾ませて駆け下りていく。

すぐあとを里香が、手に袋を持って続く。

里香 「上履き、忘れてるわよー！」

○ 緑ヶ丘市の俯瞰

残暑の厳しい太陽が街を照りつけ、奥田家のタワーマンションはピカピカと輝いている。

【了】